昭和五十八年二月二十七日（日曜日）

第百二十一回

史跡めぐり

深川方面

越谷市郷土研究会

加藤幸一

第121回 史跡めぐり

1. 日　時　昭和58年2月27日(日)

2. 集　合　越谷駅前
　　午前9時 集合

3. 方　面　深川方面

4. 往　路　越谷駅 ―東武線― 北千住駅
　　―日比谷線― 茅場町(かやばちょう) ―東西線―
　　門前仲町(もんぜんなかちょう)駅

5. コース　1ページを参照

6. 復　路　人形町 ―日比谷線― 北千住
　　―東武線― 越谷駅

7. 参加費　1500円(交通費ほか)
　　但し 昼食は別

深川方面史跡探訪

加藤幸一

史跡探訪コース

門前仲町駅（地下鉄東西線）—[1]富岡八幡宮—[2]八幡橋—[3]油堀（油堀川）跡の公園—[4]深川不動—[5]永代寺—[6]深川えんま堂—[7]佐賀町の倉庫街—[8]正米市場の食糧ビル—[9]赤穂義士の休息の碑—[10]永代橋—[11]隅田川大橋—[12]セメント工業発祥の碑—[13]平賀源内電気実験の碑—[14]採茶庵旧跡碑—[15]深川寺町—[16]紀文の墓—[17]芭蕉ゆかりの臨川寺—[18]清澄庭園（涼亭で昼食）—[19]清澄公園—[20]バレーボールの名門校中村高校—[21]清洲橋—[22]万年橋—[23]深川芭蕉庵跡（芭蕉稲荷神社）—[24]旧新大橋（江戸時代の新大橋）跡の碑—[25]芭蕉記念館—[26]新大橋—[27]震災避難の記念碑—[28]洲崎公園—人形町（地下鉄日比谷線）

江戸時代の深川を代表するものに「深川芸者のきっぷのよさ」「木場の繁昌」「富岡八幡宮の祭」の三つがあげられる。

深川芸者

江戸時代に来た芸者、門前仲町や富岡八幡宮などの周辺に散在し町家・商家の間に混在していた。羽織を着て寒中でも足袋をはかず男まさりの心意気が江戸っ子にうけた。江戸城からみて辰巳の方角（南東）にあたるので「辰巳芸者」ともいった。仲町（富岡八幡宮周辺）が代表的。今はない。

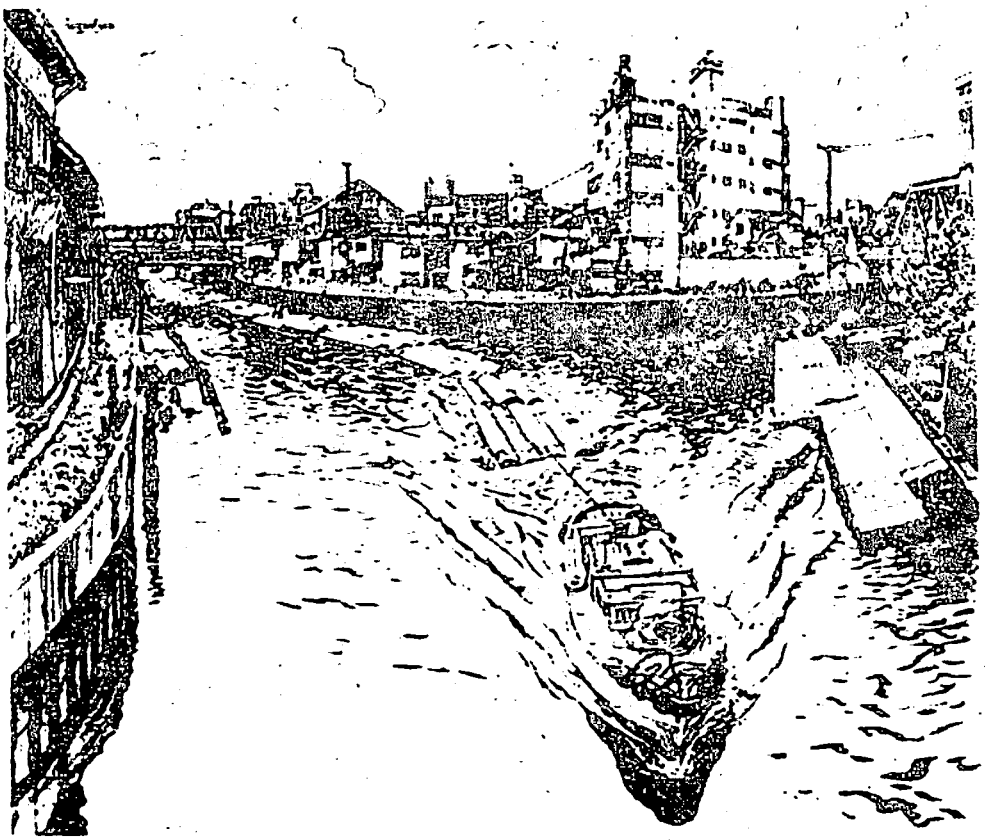
また深川生まれの深川育ちの者を「辰巳っ子」と呼ばれ江戸っ子に対抗していた。辰巳っ子には「イナセ」や「キャン」と呼ばれる心意気がみられる。歌舞伎で演ずる「お祭佐七」のような身ごしらえをした男を「イナセ」といい、人のために引きうけたらとことんまで面倒を見ようとする達引のうまい、しかも「ガサツ」な所を臆面もなく人前であらわす女を「キャン」という。

木場の繁昌

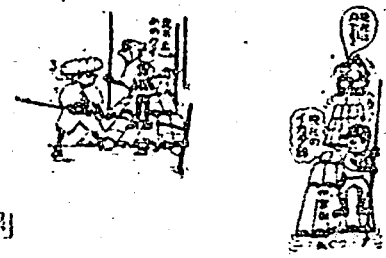
木場は現在の木場、富岡・冬木・平野あたりをさす。江戸の町の材木需要を

満たした。紀伊国屋文左衛門(紀文)や奈良屋茂左衛門(奈良茂)の両巨商がここを根城に活躍した元禄年間(1688年～1704年)の頃は木場は建設ブームに乗って金の雨が降るほどの繁昌をうたわれた。深川木場には堀割(地面を堀って造った水路)が網の目のようにみられ材木は海から筏に組まれて隅田川を上り ここに運ばれたのである。その筏を取り扱かう筏師を「川並」といい、江戸時代の川並ははち巻き・はんてん・濃紺の股引とわらじの職人姿で、木棹一本で原木をあやつり 手かぎで原木を水中に転がしては産地や木の皮と切り口より木のよしあしを判断した。なお木場とは、水につけて材木を貯えておく貯木場を意味するが ここでは材木市場があり 材木商の集中している町をさす。

騒音・粉じん公害 交通渋滞や地盤沈下で水面が上がり橋の下の通行が困難となるなどの理由で 昭和49年ごろから東京湾沿いの



埋めたて地「新木場」へ移転が始まり、昭和52年までに移転を希望した約600企業がほぼ完了した。それにともなって多くの堀り割りは埋め立てられていく。なお移転前は一次製材、原木問屋、製品問屋など約1,000企業が都内の材木の70%を扱っていた。移転後の今でも堀割に浮いている原木や昔からの材木店が多くみられる。



なお、10月の第一土曜、黒船橋の西側の堀割で水面に浮かべた角材の上で竹ざお一本でバランスを取りながら、角材を回転させたり、はしごの上での逆立ち、子供をかごに乗せての曲乗りなど、たくみに乗りこなす曲芸がおこなわれる。この曲芸を角乗りという。都の無形民俗文化財に指定されている。

富岡八幡宮の祭

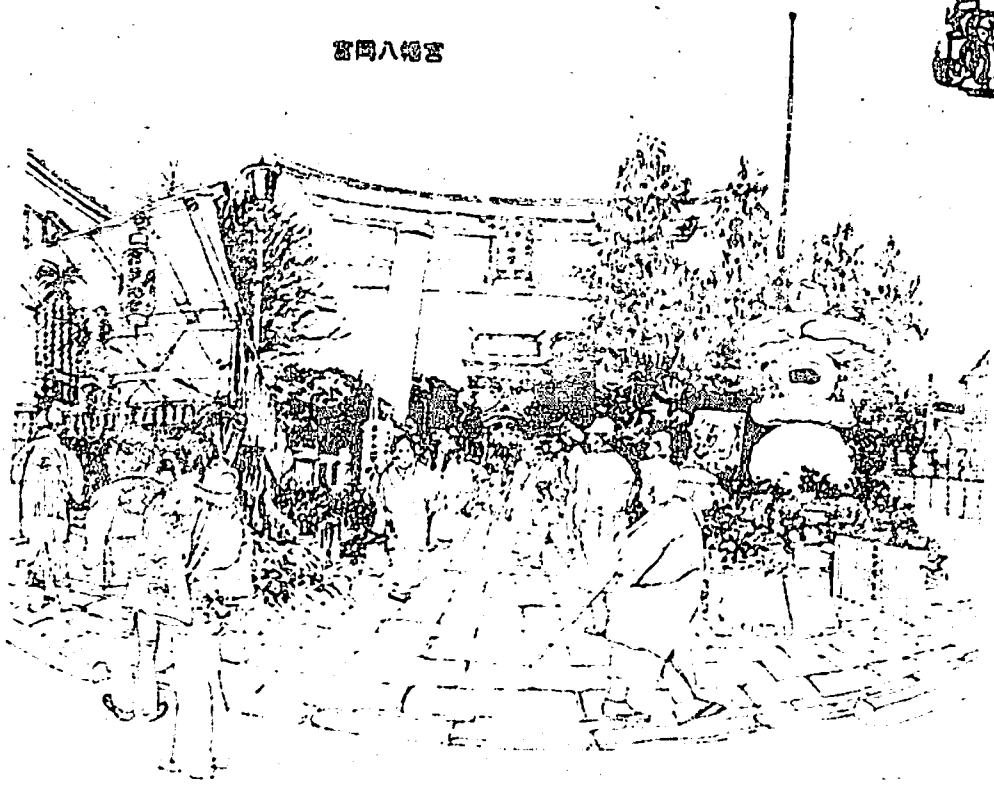
富岡八幡宮の祭りは神田明神（千代田区外神田）・山王日枝神社（千代田区永田町）と並ぶ江戸三大祭の一つである。三年に一度の本祭りには8月13日から15日にかけて盛大におこなわれ延べ8.5kmにわたる俗に言うマラソンみこしがみられる。この時夏祭りにふさわしく神輿に水をかけながら練り歩くので「水かけ祭り」の名もある。

1．富岡八幡宮

富岡八幡宮の入口の大鳥居の額の富岡八幡の「八」の字は江戸時代から二羽の鳩であらわされている。鳩は八幡さまのお使いである。

〔力持ちの碑〕江戸時代からこの近くの佐賀・福住町一帯の倉庫街に働く深川の倉庫業者の人夫の間でおこなわれた力くらべの曲技を記念したもの。約60kgの米俵を片手で軽々と持ち上げたり、あおむけになった人の腹の上に米俵を数俵積み上げ、さらにその上に小舟を乗せて餅をついたりする力持ちの曲技は現在でも受けつがれてきて、都の無形民俗文化財に指定されている。一般公開は毎年10月の第一土曜日である。なおこの力持ちの碑の

向かって左側には　力士たちが富岡八幡宮に差し出した力石がある。



〔横綱力士の碑〕　12代横綱　陣幕久五郎（この碑の向かって右側に描かれている力士）が引退後、中心になって明治28年に建てたもの。「横綱力士碑」と深く刻まれた　重さ6000貫（約20トン）もある大きな御影石の碑である。裏面に　初代横綱明石志賀之助から順に　歴代横綱の名が刻まれているが、45代若乃花（現二子山親方）で裏面は埋まり、初代トラ・大鵬らの名ははみだして横の面に刻まれ、51代玉の海で終っている。あとは　書くスペースがなく　そのまま書かれずじまいで現在に至っている。富岡八幡宮は江戸の大相撲がおこなわれたゆかりの地である。

江戸の大相撲は　寛永元年（1624年）初代横綱明石志賀之助が　四谷宝寺の境内においておこなわれたのが最初。貞享元年（1684年）に寺社奉行の許可を得て　ここの境内でおこなわれ　以来　寛政3年（1791年）両国回向院に移るまで　江戸の大相撲がここで毎年開かれた。移ったあとでも八幡宮では　明治まで花相撲がみられた。花相撲とは本場所以外に随時興行する

もの。もと木戸銭（入場料のこと）をとらず客の花（祝儀のこと）を受けた。

〔恵比須神〕　深川七福神の一つ。戦前までは深川七福神めぐりがさかんであったが昭和20年3月10日の東京大空襲によってこれら寺院・神社がそろって焼け、この風習が以後途絶えていたが昭和45年頃から復活した。七福神めぐりは松の内（1月1日～1月7日、昔は15日までであった）にするとよい。深川の七福神めぐりは普通富岡八幡宮の恵比須さまからスタートする。

〔釈迦牟尼等身の碑〕　横綱力士の碑のそばにあり。

寛延2年（1749）出雲国（現安来市）に出生。松平家のお抱え力士雷電為五郎の弟子となり、大阪で初土俵。明和7年（1770）江戸番付に東の大関として登場する。身の丈7尺5寸（2m26cm）、45貫800匁（172kg）の巨体であった。江戸在場所中の成績は23勝1分1預という高い勝率を残した。安永4年（1775）若干26歳にて没したのは惜しまれる。この碑は天明7年実弟の雷権次右衛門により建立された。（説明板より）

2．八幡橋

都内では最古の鉄橋（明治11年）。関東大震災をきっかけにここに移された（昭和4年）。富岡八幡宮のそばに移されたことから「八幡橋」と名付けた。現在国の重要文化財に指定されている。説明板によると次の通り。

八幡橋は明治11年東京府の依頼により工部省赤羽製作所が製作した長さ15.2m、有効幅員3mの単径間アーチ形式の鉄橋である。もと京橋楓川（中央区）にかけられ弾正橋と称したが大正2年市区改正事業により新しい弾正橋がかけられたので元弾正橋と改称した。大正12年関東大震災後の帝都復興計画により元弾正橋は廃橋となり東京市は昭和4年5月現在地に移して保存し、富岡八幡宮の東隣りであるので八幡橋と称した。アーチを鋳鉄

製造し　引張材は錬鉄製の鋳錬混合の橋であり，かつ細得な構造手法で施工してある．この橋は鋳鉄橋から錬鉄橋にいたる過渡期の鉄橋として近代橋梁技術史上　価値の高い橋である．

3. 油堀川跡の公園

もと油堀（この堀割にそって油の倉庫があったのでこう名付けられた）の堀割は水が流れていたが　現在は埋めたてられ　公園や駐車場などになり、上には　高速道路が走っている。深川は　堀割が縦横に多くみられ　水運に利用されて　深川の発展にはかかせなかった。今は多くの堀割は埋めたてられている。

4. 深川不動

成田山新勝寺（俗に「成田さん」という）の別院。　江戸時代の元禄16年（1703年）に富岡八幡宮の神宮寺（神社に付属しておかれた寺院）の永代寺（えいたいじ）に　新勝寺が出開帳（本尊を他の土地に運んで厨子を開いて本尊である秘仏を信者に見せること）したのが始まり。その後、毎年、出開帳は開かれ　にぎわいをみせてくる。明治になって勢力をのばし、いつのまにか　新勝寺の別院となり、新勝寺にとってかわる。

なお　この参道に「お不動さんのきんつば」として有名なきんつばを売る古くからの店がある。

5. 永代寺

深川不動があるあたりは　もと永代寺（富岡八幡宮の別当、神宮寺）があった所。今では　こぢんまりとして　おもやを取られた感じで　永代寺は　深川不動の参道のわきに　ひっそりと残っている。それゆえ　門前仲町の門前とは　実は　永代寺の門前という意味で　深川不動をさすのではない。江戸時代は　永代寺門前仲町といわれていたのである。

なお　江戸時代　ここに江戸六地蔵の一つが置かれていたが　明治の廃仏毀釈によってこわされ　今はすでにない。

6. 深川えんま堂

正しくは　法乗院というが　江戸時代から深川のえんまとして知られていた。なおここに曽我五郎の足跡と伝えられる足跡石（子供をこの石の上に乗せると曽我五郎にあやかって親孝行な子になるという）・尺八の絵を描いた虚無僧塚がある。

7. 佐賀町の倉庫街

佐賀町は 隅田川対岸の中央区中洲町、箱崎町とともに 都内の倉庫街の中心であった。江戸時代から米や油などの倉庫の町として発達してきた。堀割には 物資を満載した船がひんぱんに往来し 問屋のダンナ衆や荷揚げの人夫たちでにぎわった。深川の力持ちの発祥地である。

佐賀町がなぜ江戸時代に倉庫地帯となったか。それは 江戸の花だった火事も一応 大川(隅田川)で食いとめられるし 地価も江戸市中とはし較にならないほど安く、その上に大量輸送は船運に限られた時代である。川向こうとはいうものの、魅力的だったのである。商人ばかりでなく、全国の大小名がこの地に蔵屋敷を持つ油堀や仙台堀に 蔵米や特産物を回送貯蔵するようになった。

このような情勢につれて 佐賀町一帯は 全国の大商人の集まる所となった。商談が済むと おきまりのコースは門前仲町の辰巳芸者である。佐賀町付近の船宿から 小形の屋根つき船(ちょき船)に乗って、夕暮れ時の油堀を門前仲町付近の茶屋へ急ぐさまは、深川節にも「ちょきでゆくのは深川通い」と歌われた。

8. 正米市場の食糧ビル

明治になっても 佐賀町の倉庫街は相変わらず米・雑穀などを扱って繁栄をきわめたので 明治19年 深川正米市場の開設となった。その後 関東大震災で焼失したあと 現在の鉄筋コンクリート三階建ての中庭を持つ凹の字型の食糧ビルに生まれかわった。ビルの一階が30近くの小部屋に分かれ そこに卸売業者と仲買人約百人が店を開いていた。地下の印刷工場では その日の米価を早刷りし「東京米報」として東京の小売商に配り 東京の米相場はここできまった。太平洋戦争のため 米が配給統制となる昭和16年まで 毎朝開かれる米の市に 都内各地から米屋さんが集まり 大変なにぎわいが続いた。

9. 赤穂義士休息の碑

元禄15年(1702)12月、赤穂浪士四十七人が本所吉良邸に討ち入り 主君の浅野内匠頭のかたき吉良上野介を討ったあと 15日、明け初める吉良邸を後に

主君が眠る高輪泉岳寺に本懐を遂げたことを告げ主君に報告するために向かうのである。その途中、この店で休息し甘酒粥を振る舞ってもらうのである。俳文は次の通り

赤穂四十七士の一人大高源吾子葉は俳人としても有名でありますが、ちょうど味噌屋の代りに作兵衛木挽とは其角の門下として俳界の友でありました。元禄15年12月14日討入本懐を遂げた義士達が永代橋へ差し掛るやあたかも当所乳熊屋味噌店の上棟の日に当り作兵衛は一同を店に招き入れ甘酒粥を振る舞い労を稿らったのであります。大高源吾は棟木に由来を認め一文看板を書き残し泉岳寺へ引き上げて行ったのであります

10. 永代橋

〔永代亭 パンの会 跡〕

明治の末頃、永代橋のたもとの今の交番隣あたりに永代亭という隅田川のポンポン蒸気の待合所を兼ねた安直な洋食店があった。ここに青年文学者・青年芸術家たちが集まり議論風発、気炎をあげていた。この集まりは「パンの会」と名づけられ会員には上田敏(詩人)、北原白秋(詩人)、木下杢太郎(詩人・劇作家)、谷崎潤一郎(作者)、石川啄木(詩人)、高村光太郎(詩人・彫刻家)、吉井勇(歌人)、石井柏亭(洋画家)など後年名を成したそうそうたる人物が多かった。なお「パンの会」のパンとは、ギリシア神話に出てくる牧羊神(Pan 半獣神である)のことをさす。

〔永代橋落下事件〕

江戸時代の文化4年（1807）8月のこと、富岡八幡宮の八幡祭を見に行こうとして永代橋を渡った群集の重みで、橋の半ばあたりの橋桁が折れ、大きなすき間から、あっという間に、ばらばらと川の中へ落ちた。しかし、それとは知らない群集は、人々が前へ進んだものと思い、後から後から押し寄せていき、袋の豆をこぼすように、次々と川の中に落ちていった。この橋事故で死んだ者は500人とも1500人ともいわれ、その数はつかめなかった。

11. 隅田川大橋

隅田川大橋は、昭和54年10月15日に開通した二階建ての橋である。上には成田空港へ通じる首都高速9号線がはしり、歩道はその下の階にみられる。江東区佐賀町と中央区日本橋箱崎町とを結んでいる。この橋の歩道にのるために、護岸付近に階段と自転車や車イス専用のなだらかなスロープが取り付けられている。橋上からは、川下に永代橋が、川上には清洲橋がみられる。

12. セメント工業発祥の碑

わが国が最初にセメント製造に成功した所、明治政府はここを後に浅野セメントに安く払い下げをした。この浅野セメントの工場は、「江東区の歴史」（名著出版）と「江東区史跡散歩」（学生社）によれば、エントツから周辺地域に白いセメントの粉をまきちらしてした都市公害第一号といえる。当時は大問題になったようで、その頃に次のような浅野セメントを皮肉った歌がはやった。

「月が出た出た月が出た、セメント会社の上に出た、東京にゃエントツ多いので、さぞやお月さん煙たかろう」

これは、後にはやった炭坑節のルーツといえる。

13. 平賀源内電気実験の碑

平賀源内はエレキテルを作り、わが国ではじめて電気実験をした所である（1776年）。その後、この自宅においてしばしば電気実験をおこない人々を驚かせた。

源内は享保13年高松藩小吏の家に生れ　和洋の学を勉学し　物産館の開設・毛織物の試作・源内焼の製陶・石綿布の創作利用・水準器・寒暖計の創作等かずかずの発明工夫をなし　かつ神霊矢口渡の戯作者でもある．源内はわが国最初の電気学者にして　安永5年　エレキテルを完成し　この付近　深川清住町現在の清澄一丁目私宅において電気実験を行ない　同8年51歳にて没した．（説明文より）

14．採茶庵　旧跡碑

海辺橋の近くに　松尾芭蕉の弟子　鯉屋杉山杉風の別邸があった．今の深川警察署あたりか．芭蕉は　深川六間堀の深川芭蕉庵からしばしばここを訪れている．また　芭蕉の「奥の細道」の出発点でもある．芭蕉はここから元禄2年（1689）舟で千住に向かい「奥の細道」の最後の長旅に出発したのである．なお　杉山杉風は　屋号を鯉屋といい，号を採茶庵などともいった．芭蕉のよき理解者であり　金銭的な面の援助者でもあった．

15．深川の寺町

白河一丁目，清澄三丁目，三好一・二丁目，平野一丁目，深川二丁目あたりを寺町と俗に言う．寺院の数は現在でもおよそ40くらいある．その中でも霊巌寺が代表的である．

16．紀伊国屋文左衛門の碑と墓

紀州（和歌山県）の出身．みかんを江戸に運んだのが財をなすきっかけとなったとの伝説がある．元禄の建設ブームにのって材木商を手広く営んで豪商となる．紀文または紀文大尽とも言う．花街で芸者をよんで豪遊した話は有名．この碑は紀州青石の巨石を使用している．この碑のわきに墓と伝えられる墓石がある．

17．芭蕉ゆかりの臨川寺

深川芭蕉庵に住んでいた芭蕉が　この寺の仏頂と親交をまじえ，朝夕ここで座禅を組んでいたという．境内には「芭蕉墨直しの碑」・「芭蕉由緒塚の碑」

がある。

18. 清澄庭園（昼食 及び 休憩）

ここは 元禄の頃、紀伊国屋文左衛門（紀文）の別邸があった所という。明治になって岩崎弥太郎（三菱の創始者）の別邸となる。岩崎家が全国各地から集めた奇岩珍石がある。東京の三大庭園の一つとなっている。（六義園・後楽園・清澄庭園）

本園は、はじめ江戸の豪商紀国屋文左衛門の邸地であったといわれ、その後、諸大名等の下屋敷としてもちいられてきましたが、明治十一年に至って岩崎家の所有するところとなり、同二十四年和洋両館をそなえる大庭園を完成させました。

池泉には、隅田川から水を導き、潮の干満により庭園に変化をもたせた潮入りの回遊式築山泉水庭で、大小の島や磯渡りを造り、池辺には岩崎家が全国各地より蒐集した奇岩珍石を巧みに配置してあります。

大正十二年の関東大震災後、現在の庭園部分を東京市が寄付を受けて修復し、昭和七年一般に公開しました。又この間には皇室より下賜された大正天皇葬場殿を現在地に移設修築し、大正記念館と命名、集会場として一般に公開しています。

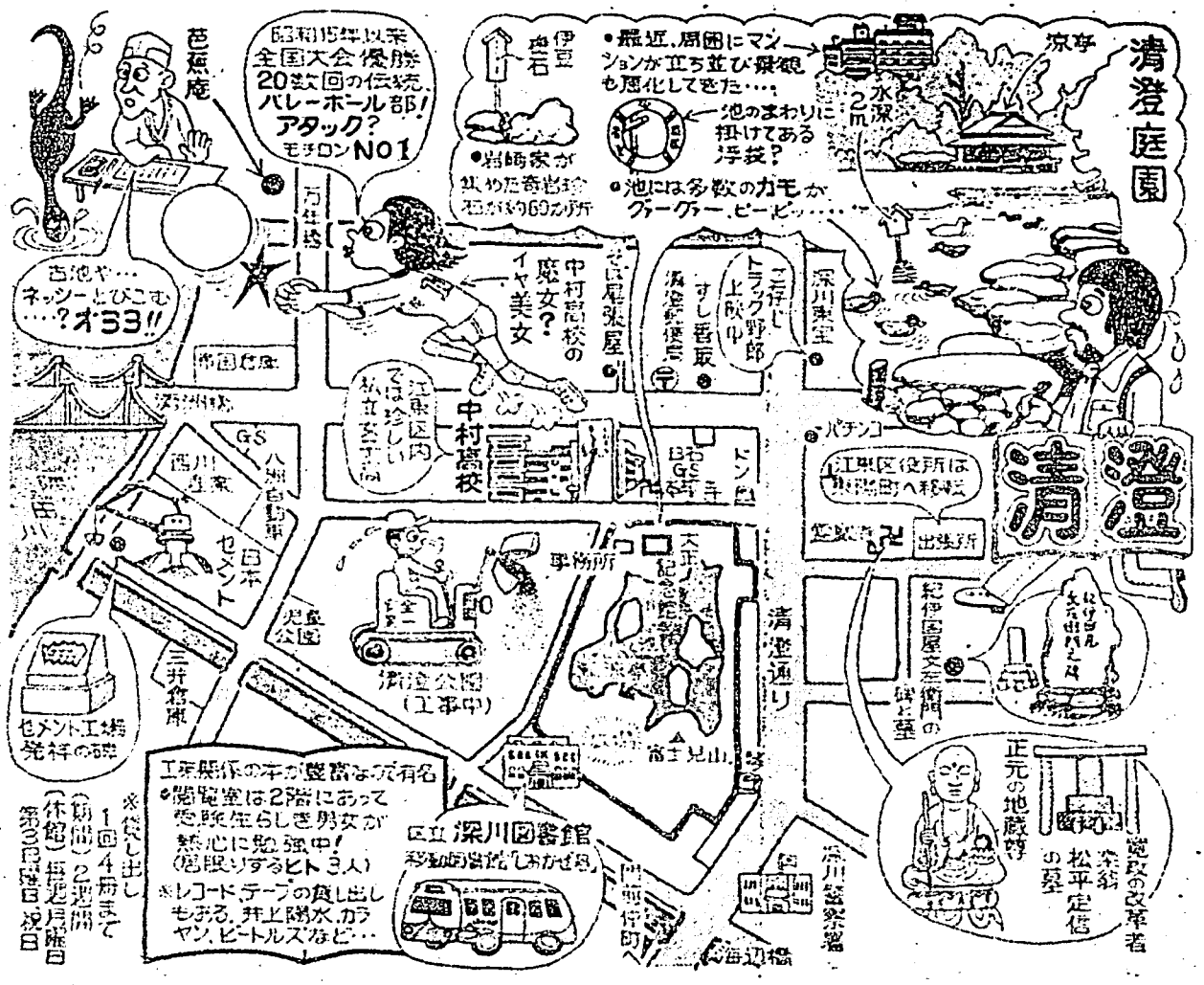
昭和二十年三月、本園は全域にわたり戦火を受けましたが、戦後は記念館の再建と併せて、奇跡的に焼失を免がれた涼亭や池辺の庭石等をもとに逐次園景も修復され、今なお明治時代の代表的庭園として知られています。

開園年月日　昭和七年七月二四日

面　　積　三八、七七一平方米

19. 清澄公園

清澄庭園と同じかつての岩崎家の庭園であった所。昭和5年　都立公園として完成。



20. 中村高校

昭和15年以来、バレーボール全国大会の優勝が20数回の伝統を持つ（女子）バレーボールの名門校。休み中でもよく練習している。

21. 清洲橋（きよすはし）

江東区側の清澄と中央区側の中洲（なかす）とを結ぶ隅田川にかかる橋。隅田川にかかる橋の中では最も美しい橋といわれる。永代（えいたい）橋の男性的な力強さに対し、女性的優美さがある。ドイツのケルン市に流れるライン川にかかる吊橋（つりはし）をモデルにしている。東京最大の吊橋である。

22. 万年橋（まんねんばし）

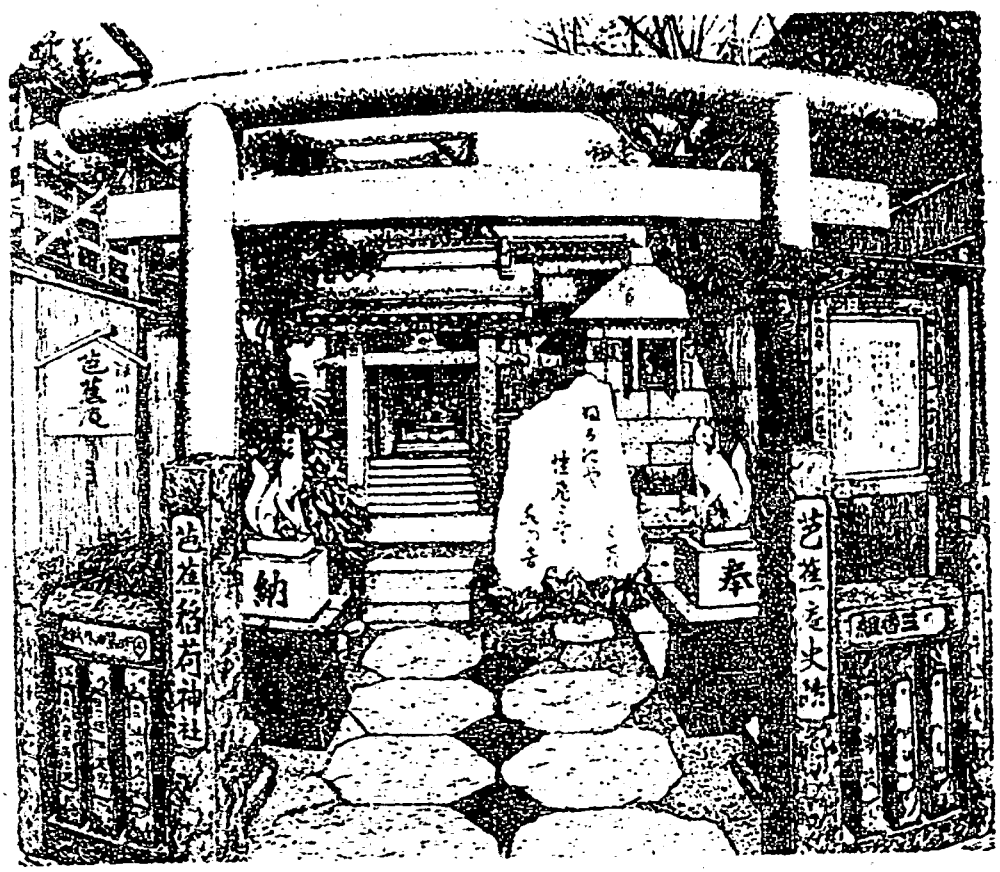
江戸時代　この万年橋からの富士の眺（ながめ）のはすばらしい。　葛飾北斎も「富嶽三十六景」深川万年橋下には大きく広く遠く　橋の下に富士を画いている。　北斎は重き「名所江戸百景」に万年橋を大きな竜を配して画き　樹は千年竜は万年にかけている。

23 深川芭蕉庵跡（芭蕉稲荷神社）

[illegible]

24. 旧新大橋（しんおおはし）の碑

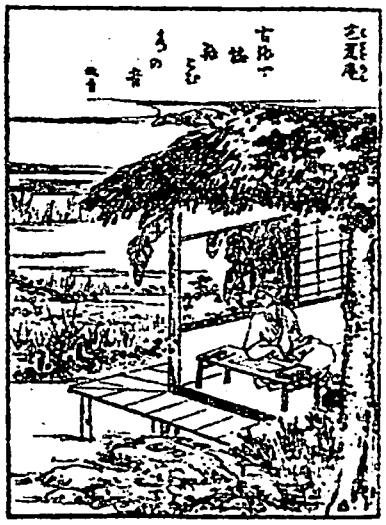
旧新大橋は　元禄6年12月　この地先の隅田川に架設起工し　52日間で完成し　長さ百間（けん）　幅三間七すあり　当時　橋名は両国橋を大橋と称していたので　この橋を　新大橋といった。近くの深川芭蕉庵にすんでいた芭蕉は　新大橋の工事中「初雪や　かけかかりたる　橋の上」の句をよみ　また　橋の完成をみて「ありがたや　いただいて踏む　橋の霜」の句をよんだ。



芭蕉稲荷

25. 芭蕉記念館

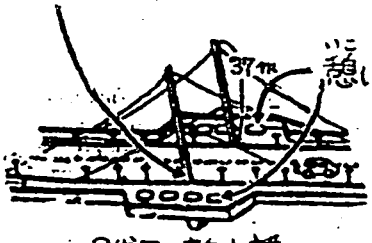
昭和56年4月にオープンした、真鍋儀十氏の貴重なコレクションが中心となって展示されている。



芭蕉庵（江戸名所図会）

新大橋（しんおおはし）

堵に広重のにしき絵、2代目の橋の全景、橋の由来の文字盤がはめ込まれている



3代目 新大橋

新大橋(しんおおはし)…関東大震災と東京大空襲に この橋の上で多くの人々が助かった。付近の人は「人助けの橋」と言っている。現在の新大橋は昭和52年に架(か)けかえられたもの。橋の中央に憩いのベンチが作られ、明治の新大橋(鉄橋)のレリーフと安藤広重の新大橋の夕立(ゆうだ)ちとあわただしい人物、黒雲、筏を描いた「大はし あたけの夕立」(新大橋を大橋とも呼んだ)のレリーフがみられる。なお、ヴァン・ゴッホはこの「大はしあたけの夕立」を油絵で模写している。

新大橋の由来(説明文より)

新大橋は元禄6年(1693年)12月7日に現在地よりやや下流にはじめて木の橋が架けられた

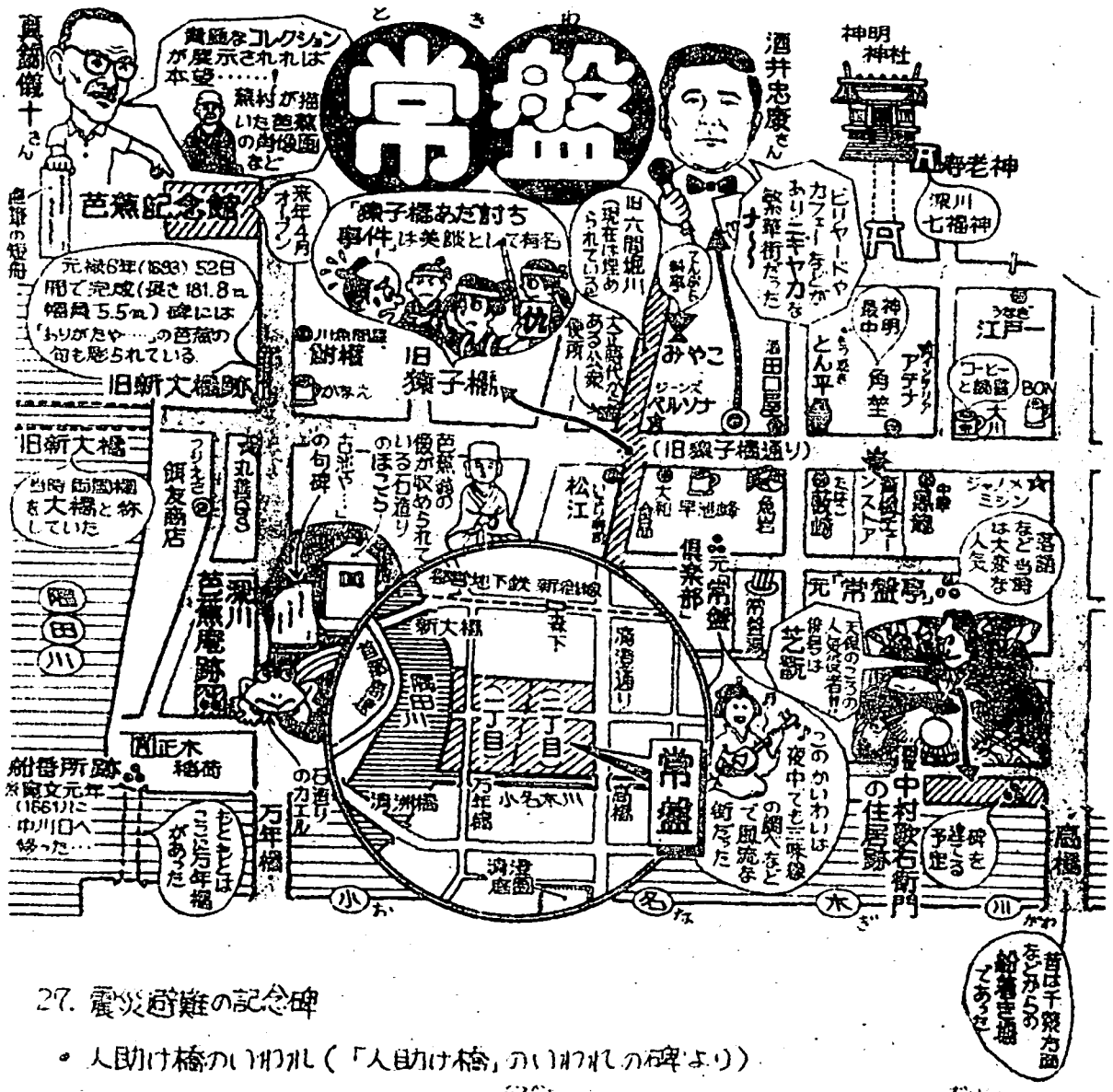
両国橋が万治2年(1659年)に架けられてその当時「大橋」と呼ばれていたので、その下流に新しく架けられたこの橋を「新大橋」と称した。その頃 新大橋近くの深川に住んでいた俳人松尾芭蕉は新大橋の架橋を喜んで次の句をよんだ

初雪や かけかゝりたる 橋の上　　有難や いたゞいて踏む橋の霜

以来 新大橋はたびたび架けかえられたが明治45年(1912年)7月19日、現在位置に鉄橋の新大橋が誕生した。

この鉄の橋は 関東大震災(1923年)および太平洋戦争の大空襲(1945年)にも耐え 橋上において多くの人々の命が助かったため「人助けの橋」といわれるようになった。その鉄橋は60有余年の間、道路橋としての使命を十分に果たして 昭和52年3月27日 現在の橋に架けかえられた。

なお その鉄橋の一部は 愛知県 犬山市の「明治村」に保存されている。



27. 震災避難の記念碑

- 人助け橋のいわれ(「人助け橋」のいわれの碑より)

大正12年(1923年)9月1日 突如として起こった関東大震災は 随所で火災を誘発し そのため 各所で橋が焼け落ち 多数の痛ましい犠牲者を出した。しかし 幸いにも 明治45年に建造された新大橋だけは火災からまぬかれ 逃げ惑う一万有余の尊い生命を救い かつ 遮断された各方面への交通を一手に引き受けて 避難橋としての重責を十分に果たした。そのため 新大橋は 多くの人々から「人助け橋」と呼ばれ 永く親しまれるようになった。

なお 当時 久松警察署の新大橋西詰派出所に勤務する羽鳥源作 三村光

今給穂克巳 植木機神 伊藤盈雄 浅見武雄ら 各警察官は 一致協力して多数の避難者を誘導し さらに携行してきた荷物を橋詰で適切にさばいて火災の防止と避難路の確保のために活躍されたという。一身を顧りみず 沈着勇敢に行動されたその功績は 永く後世に称えられるべきものである。

28. 浜町公園

このあたりは もともと長谷川の地で 明治初頃は著名な料亭が集まり浜町河岸として情緒の深い所として知られた。今は そのおもかげは なくなってしまった。

◎追加「霊巌寺」

霊巌寺は 霊岸島(今の中央区新川1・2丁目)から ここに移ってきた寺院で 深川寺町の代表的な寺。地蔵坊正元という人が 造立した江戸六地蔵のうちの一つが ここにある。正元が子供の頃 お地蔵に祈願したら病気がなおったことがあったので 寄付金を集めて(各街道口に)江戸六地蔵を建てたのである。銅製の大きな地蔵座像となっている。なお江戸六地蔵は 次のとおり

1番 東海道口 江戸六地蔵 品川寺(品川区南品川 3-5-17)
2番 甲州街道口江戸六地蔵 太宗寺(新宿区新宿 2-9-2)
3番 中山道口 江戸六地蔵 真性寺(豊島区巣鴨 3-21-21)
4番 奥州街道口江戸六地蔵 東禅寺(台東区東浅草 2-12-13)
5番 水戸街道口江戸六地蔵 霊岸寺(江東区白河 1-3-32)
6番 千葉街道口江戸六地蔵 永代寺(江東区富岡町 明治の廃仏毀釈で消滅)

なお 寛政の改革(1787年～1793年)で有名な松平定信の墓が ここにみられる。

主に使用した本 新聞 その他

江東区 史跡あちこち(江東区企画広報部) 読売新聞 55.10.13
新日本ガイド5 (交通公社) 54.11.5 52.12.26 51.1.19
江東区の歴史(名著出版) 江東区の史跡散歩(学生社) 絵はがき

松尾芭蕉について

〔松尾芭蕉〕

芭蕉は正保元年(1644)、今の三重県上野市(一説には三重県伊賀町)に生まれる。桃青の俳号で活躍したのは日本橋小田原町に住んでいた頃。その後一時小石川(今の文京区)の関口芭蕉庵に住む。延宝8年(1680)37歳の時深川六間堀の深川芭蕉庵に移る。六間堀(今は埋めたてられてない)と小名木川の合流地点あたりに芭蕉の門人杉山杉風の敷地があったが この敷地内に いけすの番小屋を手入れした芭蕉の住まいがあった。門人の一人(李下)が 一株のバショウをここに植えたことから芭蕉庵と称せられ この芭蕉を愛したことから俳号を芭蕉と称した。同庵は一度火災にあい再建されている。このあたりは寂しい寒村にすぎず 芭蕉はここで独自の俳風を目指し 一人暮らしの孤独で質素な生活をおくっていた。そしてここを根拠地として全国の旅に出て 著名な紀行文や俳句を残している。元禄2年(1689)、46歳の時に「奥の細道」に最後の旅立ちを雲水の姿でするのである。

〔芭蕉稲荷神社〕(深川芭蕉庵跡)

わずか20m²足らずのこの芭蕉稲荷は 大正10年に 有名な芭蕉の句「古池や蛙とびこむ水の音」で知られた「芭蕉翁古池の跡」として東京府から史跡として指定をうけている。現在、都指定旧跡の「深川芭蕉庵跡」となっている。芭蕉庵跡は実際にはもう少し東寄りにずれていたとも推定されている。

〔江東区芭蕉記念館〕

深川芭蕉庵跡近くの隅田川のほとりに 昭和56年4月にできた芭蕉に関する鉄筋コンクリート三階建ての記念館。「俳人笠」を形どった銅板ぶきの浅みどりの屋根をいただき 外壁がみかげ石の白亜の建て物である。この記念館ができるにあたって 都側は清澄庭園の隣の清澄公園内に、地元側は芭蕉ゆかりの地にとの意見の対立がみられた。結局、芭蕉ゆかりの地におちつく。芭蕉稲荷から北に150m離れた都有地に決定し 江東区がゆずりうけることとなったのである。

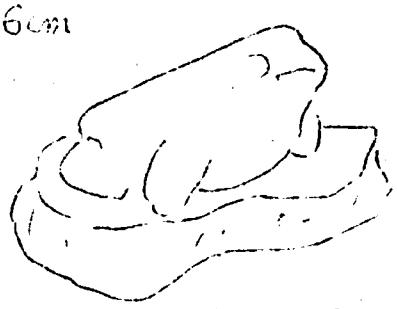
展示室には 芭蕉直筆の短冊・手紙や肖像画、門人の掛け軸など多量のコレク

ションを寄贈した芭蕉研究家の真鍋儀十氏（元代議士で普選運動に身を投じた経験がある）の真鍋コレクションがみられる．真鍋氏は 生まれは曾良の客死を記した碑がある壱岐島で 学校でここで客死した曾良とその師である芭蕉との関係を教えてもらう．上京後．のちに曾良が芭蕉の身の回りの世話をしたといわれる深川の芭蕉庵跡近くに住む．曾良は芭蕉の「奥の細道」の旅にも同行した門人。

[illegible]館わきには 江戸の昔をしのばせる庭園があり 芭蕉稲荷にあった句碑二基（「古池や蛙飛びこむ水の音」「川上とこの川しもや月の友」）と俳聖芭蕉の座像とがここに移ってきている．句碑二基は庭園のせせらぎのそばに配置され、築山の頂には 芭蕉の座像がまつられたほこらがある．また バショウや遊行柳などの芭蕉の俳句のゆかりの木々を植えている．

〔芭蕉が古池のそばに置いて愛したと伝えられる石造りの蛙〕

この石造の蛙は 「古池や蛙飛びこむ水の音」の句にちなむ像で 体長21cm 長さ26cm 幅20cm 高さ16cmの蛙が 厚さ6cmの台に座った形の小松石の石像である．重さは台を含めて7kg．

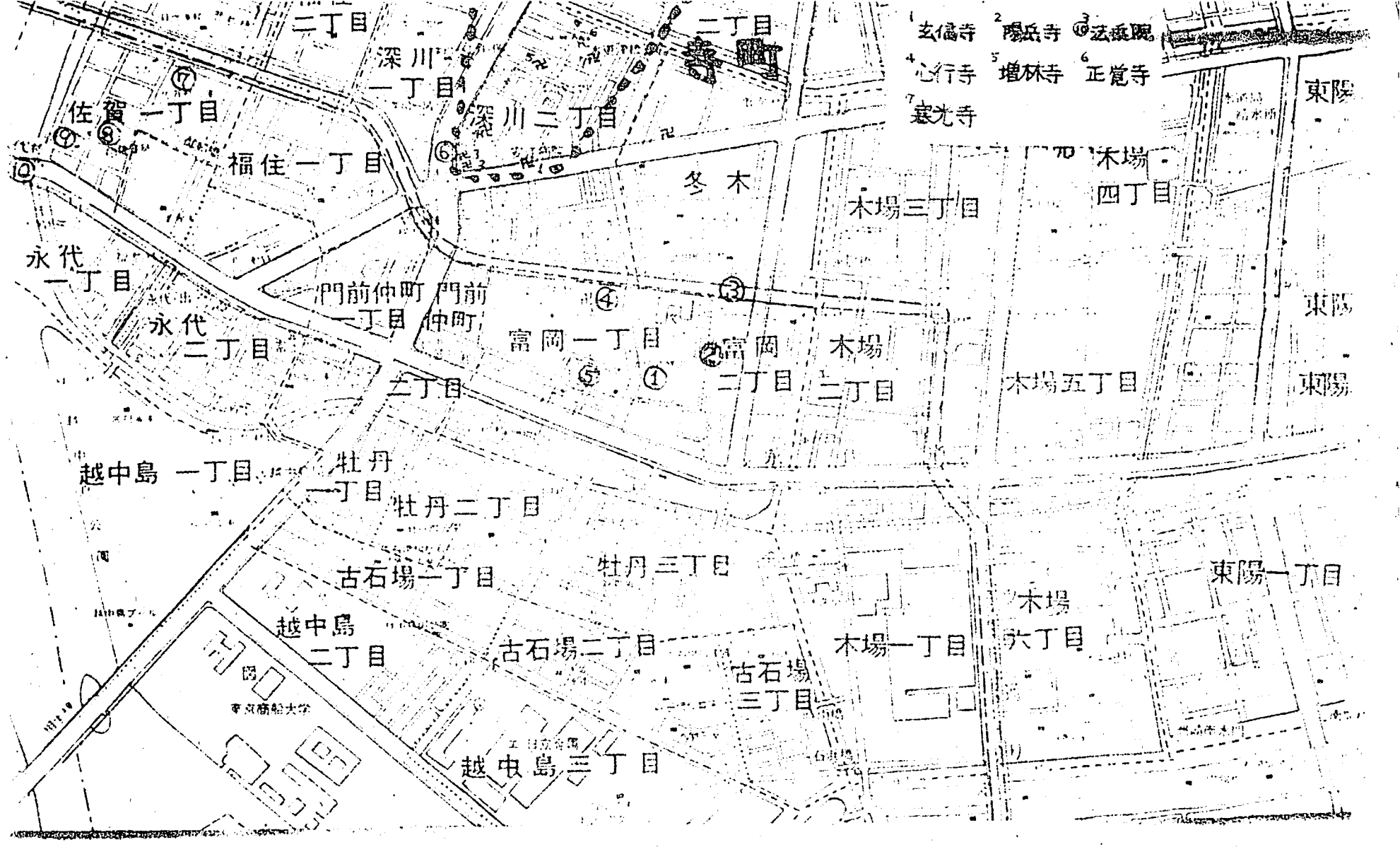


明治初年に深川芭蕉庵が取り払われた時に行方不明になったが 大正6年9月の台風による大津波が引いたあと 現在の芭蕉庵跡付近で 泥の中から発見されたという．そこで ここに芭蕉稲荷を作って これをまつった．ところが 昭和20年3月10日午前0時8分の東京大空襲の際 近所の人が持って避難したままになって また行方不明となる．芭蕉記念館完成前年の昭和55年に．芭蕉稲荷近くの鉄工業飯田氏宅で10数年使っていない開かずの耐火金庫を開けたところ ふろしきに包まれたこの石造りの蛙が見つかったのである．

なお 文政9年（1826）の「埋木之花」（平一貞著）という書物に「（庵のそばの）青石は蛙の立てし姿に似たりとて翁（芭蕉）常に愛しところの石なり」と記されている．この蛙が芭蕉お気に入りの青石なのであろう．

（読売新聞 53.10.6 54.9.13 55.3.7 56.1.20 56.4.18 56.4.20 57.3.26 朝日新聞 54.9.7 55.12.12）

❷
中央区
千歳一丁目
千歳二丁目
千歳三丁目
新大橋一丁目
新大橋二丁目
新大橋
立川一丁目
立川二丁目
立川三丁目
四丁目
江東橋五丁目
菊川一丁目
菊川二丁目
森下一丁目
森下二丁目
森下三丁目
森下四丁目
高橋
常盤一丁目
常盤二丁目
日本橋浜町三丁目
日本橋中洲
白河一丁目
白河二丁目
清澄一丁目
清澄二丁目
清澄三丁目
三好一丁目
三好二丁目
平野一丁目
石島
千石一丁目
深川寺町の寺院（一部）
白河一丁目
A 霊巌寺 B 雄松院
清澄三丁目
1 臨川寺 2 本覚寺 3 江月院
4 常照院
三好一丁目
1 禁華院 2 正覚院 3 法性寺
4 清生院 5 松林院 6 弊至院
7 円通院 8 円隆院 9 唱行院
10 一乗院 11 成等院 12 長専院
三好二丁目
ア 摂心院 イ 潮江院 ウ 善徳寺
エ 一言院 オ 雲光院 カ 龍光院
キ 照光院
平野一丁目
ア 玉泉院 イ 本立院 ウ 善応院
エ 円珠院


二丁目
深川一丁目
二丁目
1 玄信寺
2 陽岳寺
3 法華院
4 心行寺
5 増林寺
6 正覚寺
7 寂光寺
佐賀一丁目
深川二丁目
福住一丁目
冬木
木場三丁目
木場四丁目
東陽
永代一丁目
門前仲町一丁目
門前仲町
永代二丁目
富岡一丁目
富岡二丁目
木場二丁目
木場五丁目
東陽
越中島一丁目
牡丹一丁目
牡丹二丁目
牡丹三丁目
古石場一丁目
東陽一丁目
木場六丁目
越中島二丁目
古石場二丁目
木場一丁目
古石場三丁目
東京商船大学
越中島三丁目